Osaka University Knowledge Archive

Title	アンリ・マティスとその芸術 : 画家と美術評論の関係の解明
Author(s)	大久保, 恭子
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41996
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【13】

氏　　名	大久保　恭　子（おおくぼ　きょうこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　15106　号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学　位　論　文　名	**アンリ・マティスとその芸術－画家と美術評論の関係の解明－**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　若山　映子 （副査） 教　授　神林　恒道　　助教授　圀府寺　司

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、1904年から1908年までのアンリ・マティスの活動に焦点を絞って、彼の絵画とことばを分析すると同時に、当時の美術評論と芸術家の活動に注目しつつ先行諸研究を再考することで、20世紀初頭のパリの美術界、画家たちと批評家、コレクターの関係を明らかにし、彼の画風展開と美術評論との関係を解明している。

論文は、七章からなる本論に序論と結語を加えた400字詰原稿用紙に換算して314枚の本文、83枚の註、55枚の文献一覧、24枚の図版一覧からなるＡ４版全165頁１冊と、88葉の写真を収録した別冊図版集２冊の計３冊で構成されている。

序論では、マティスに関する先行研究の傾向を三通りに大別して、様式に基づく論説と作品の主題別に考察する論考とを批判的に概観しながら、マティスの著作「画家のノート」を当時の評論や芸術理論との関係で見直すことを提唱したロジャー・ベンジャミンの方法論を支持し、画家が生きた社会、特に美術界の状況と、彼の周辺の出来事を検討し直すことで、美術評論とマティスの活動との相関関係を探るという論文の意図を明確にする。

第一章から第三章は、マティスが1905年に新印象主義の画法を採用して描いた《豪奢、静寂、逸楽》と、その翌年アンデパンダン展に出品して広く顰蹙を買った《生きる喜び》を中心に展開する。これら二作の間に指摘される様式の余りに顕著な変化は、一貫性の欠如として発表当時厳しく批判されたが、そこにこそ画家の真摯な探求の軌跡が認められるということを実証的に論じる。それは、固有色にとらわれずに配色の妙で画面を構成していたセザンヌの手法を研究した成果であった。そして、行きすぎた単純化と図式化、空虚さという批判を受け止めて、マティスが、自作に欠落していた形態の量感表現へと軌道修正をおこなっていく過程を検証する。

さらに《生きる喜び》の主題に関してマティスが影響を受けた画家と見なされるピュヴィ・ド・シャヴァンヌの作品を分析し、両者の絵画観の根本的な相違を確認する。また、評論に現われる「装飾」「総合」という用語の多義性、その解釈の多様性を明確にし、マティスにとっての装飾、総合の本質、彼の様式の特性を浮き彫りにする。

第四章では、1907年のアンデパンダン展に出品した《タブローⅢ》、後に《青いヌード（ビスクラの思い出）》と呼ばれることになる作品を中心に論じる。その画像の特徴と、マティスが当時アフリカの彫像を入手していた事実の故に、その絵画とアフリカ美術との強い関係が指摘されてきた。しかし、アフリカ彫像と画家の描いた裸体女性像との間には形態上の類似性はない。マティスは、アフリカ彫像に潜む強烈な表現力が大胆に変形された形態に起因し、セザンヌの作品の強さもまたデフォルマシオンに由来すると気づいて、西洋美術の伝統的ヴィーナス像と春の目覚めを

象徴する菫を描きながら、形態の奔放な歪みや不器用さを敢えて強調したのである。画家のこの選択は、セザンヌの後継者たることをマティスが意識したことによる。実際1899年に初めてセザンヌの「不器用さ」が「すばらしい誠意のあらわれ」と評されたのに始まり、不器用さや歪曲が美術評論において評価の対象と見なされてくるのとマティスに対する理解や評価とが連動していたことを論文は明らかにする。

第五章では、ピカソがパリ美術界での前衛の頂点に立ち、ブラックが「マティス派からピカソ派への転向を宣言していた」時期に、執筆依頼を受けてマティスが著わした「画家のノート」は、画家の率直な信条や絵画観の吐露ではなく、フランス絵画の伝統の継承者としての自己アピールを企図し、社会的、経済的な地位の確立を狙った著作であったことを、掲載作品の傾向と著作の文章や用語の分析をとおして詳述する。

第六章は、1905年のサロン・ドートンヌで観衆の嘲笑の的となったマティスの《帽子の女》に注目して購入した文筆家でコレクターのガートルード・スタインとマティスの関係を、20世紀美術の展開に彼女のサロンが果たした役割の大きさを視野に入れながら考察する。彼女が《作品Ⅲ》購入を最後にマティスを離れて思想を共有する「共闘者」をピカソに求めていった経緯を、彼女の社会的な立場、文筆活動の考察をとおして論じる。

第七章においては、「プリミティヴ・アート」という用語が、美術史の中でいつ何を指して用いられ始めたのか、その対象範囲がいかにして拡大理解され、どの時点でアフリカ美術をも包括するに至ったのかを検証し、《作品Ⅲ》の批評を再検討する。マティスにとってアフリカ美術は、フランス絵画の伝統の活性化を促し、彼自身の様式確立に寄与するものであった。しかしモダニズム絵画史観の中でそれが占める位置に変化が生じて、「プリミティヴィズム」という一つの概念が形成されていった状況を、文献を再検討することで解明している。

論文審査の結果の要旨

近代から現代への西洋美術の展開は、一般に、セザンヌからピカソへの流れとして捉えられている。そうした美術史観が形成された過程に関心を抱き、マティスの研究が母国フランスよりも英語圏においてはるかに多いという実情が何に由来するのかを明らかにしたいとの考えに基づいて、執筆者は20年余り研究に取り組んできた。

本論は、マティスに対する評価が大きく変化した1904年から1908年にかけて、パリ在住の芸術家、評論家、コレクターの動向が、彼の画風の展開に密接に関係していたことを実証的に論じて、マティスの制作姿勢を明らかにし、画家が絵画に求めていたものがどのように作品に表現されているかを的確に分析している。加えて、モダニズム美術史観の形成に、パリにおけるユダヤ系アメリカ人ガードルード・スタインのサロンが果たした役割を指摘し、制作と受容と批評の問題に迫る。また、20世紀の美術評論の中で使われてきた、「総合」、「装飾」、あるいは「プリミティヴ」という用語が、過去においてはさまざまな立場によって異なったことを指示していた事実を具体的に指摘し、それが評論史の中で変貌する様相を描き出して、美術評論の研究に一石を投じた。こうした諸点において、本論文は、近代から現代に向かう西洋美術の展開を扱った研究の中で高く評価される。

ただし本論文が、すでに刊行された5篇の論文をもとに加筆訂正、再構成された部分と、新たに書き下ろした部分とからなることにより、部分的ながら内容の繰り返しが見られ、全体の文章に均一性が欠けるなど、構成上の問題点は指摘される。また、本人にとっては自明の理となっている論拠が、時としては言葉で十分に表わされていないために、難解な部分もある。

しかしながら、これらの短所は、論文の本質に関わるものではなく、本研究の内容を貶めるものでもない。よって本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。